

日本文学全集

8

夏目漱石
(一)

吾輩は猫である・坊っちゃん・三四郎

河出書房

夏目漱石 (一)



カラー版日本文学全集 8

1967©

昭和四十二年四月二十日 初版印刷
昭和四十二年四月二十五日 初版発行

定価 七五〇円

著者 夏目漱石

発行者 河出朋久

印刷者 草刈親雄

装幀者 亀倉雄策

本文印刷 中央精版印刷株式会社

口絵印刷 凸版印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

製函 加藤製函印刷株式会社

本文用紙 本州製紙株式会社

クロース 日本クロス工業株式会社

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三丁目六番地

電話 東京(292)三七一一(大代表) 振替 東京一〇八〇二

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

夏目漱石(一)

吾輩は猫である

.....五

坊っちゃん

.....二〇九

三四郎

.....二六七

注 釈

紅野敏郎 三六一

年 譜

井上百合子 三九三

解 説

佐伯彰一 四〇五

色刷挿画 吾輩は猫である

中村琢二

坊っちゃん

鈴木信太郎

三四郎

風間 完

夏
目
漱
石
(一)

吾輩は猫である

吾輩は猫である。* 名前はまだ無い。

どこで生まれたかとうと見当がつかぬ。なんでも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というのを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中でいっぽん癡悪な種族であったそうだ。この書生というのは時わかれわれをつかまえて煮て食うという話である。しかしその当時はなんとという考えもなかったから別段恐ろしいとは思わなかった。ただ彼の手のひらに載せられてスーと持ち上げられた時なんかフワフワした感じが有ったばかりである。手のひらの上で少し落ち付いて書生の顔を見たのがいわゆる人間というものの見始めであろう。この時妙なものだと思つた感じが今でも残っている。第一毛をもつて裝飾されべきはずの顔がつるつるしてまるで柔鱗だ。その後猫にもだいたい会つたがこんな片輪には一度も出くわした事がない。のみならず顔のまん中があまりに突起している。そうしてその穴の中から時々ぶうぶうと煙を吹く。どうもむせぼくて実に弱つた。これが人間の飲む煙草というものである事はようやくこのごろ知つた。

この書生の手のひらのうちでしばらくはよい心持ちにすわつておつたが、しばらくすると非常な速力で運転し始めた。書生が動くのか自分だけが動くのかわからないがむやみに目が回る。胸が悪くなる。到底助からないと思つていると、どさりと音がして目から火が出た。それまでは記憶しているがあとはなんの事やらいくら考え出そうとしてもわからない。

ふと気がついてみると書生はいない。たくさんおつた兄弟が一匹も見えぬ。肝心の母親さえ姿を隠してしまつた。その上今までの所とは違つてむやみに明るい。目を明いてもられぬくらいだ。はてなんでも様子がおかしいと、のそのそはい出してみると非常に痛い。吾輩は薬の上から急に笹原の中へ捨てられたのである。

ようやくの思いで笹原をはい出すと向こうに大きな池がある。吾輩は池の前にすわつてどうしたらよからうと考えてみた。別にこれという分別も出ない。しばらくして泣いたら書生がまた迎いに来てくれるかと考えた。ニャー、ニャーと試みにやってみたがだれも来ない。そのうち池の上をさらさらと風が渡つて日が暮れかかる。腹が非常に減つて来た。泣きたくても声が出ない。しかたがない、なんでもよいから食い物のある所まであるこうと決心をしてそろりそろりと池を左に回り始めた。どうも非常に苦しい。そこを我慢して無理やりにはつてゆくとようやくの事でなんとなく人間臭い所へ出た。ここへはいつたら、どうにかなると思つて竹垣のくずれた穴から、とある邸内にもぐり込んだ。縁は不思議なもので、もしこの竹垣が破れていなければなら、吾輩はついに路傍に餓死したかもしれんのである。一樹の陰とはよく言つたものだ。この垣根の穴は今日に至るまで吾輩が隣家の三毛を訪問する時の通路になつてゐる。さて屋敷へは忍び込んだもののこれから先どうしていいかわからない。そのうちに暗くなる、腹は減る、寒さは寒し、雨が降つて来るという始末でもう一刻も猶予がでなくなつた。しかたがないからとにかく明くて暖かそうなほうへほうへとあるいてゆく。今から考えるとその時はすでに家の内にはいつておつたのだ。ここで吾輩はかの書生以外の人間を再び見るべき機会に遭遇したのである。第一に会つたのがおさんである。これは前の書生よりいっそう乱暴なほうで吾輩を見るや否やいきなり首筋をつかんで表へほうり出した。いやこれはだめだと思つたから目をねぶつて運を天に任せていた。しかしひどい寒いのにはどうしても我慢がでせん。吾輩は再びおさんのすきを見て台所へはい上がった。す

るとまもなくまた投げ出された。吾輩は投げ出されてはい上がり、はい上がっては投げ出され、なんでも同じ事を四五へん繰り返したのを記憶している。その時におさんという者はつくづくいやになった。このあいだおさんのさんまを盗んでこの返報をしてやっつてから、やっとな胸のつかえがおりた。吾輩が最後につまみ出されようとしたときに、この家の主人が騒々しいなんだといいながら出て来た。下女は吾輩をぶら下げて主人のほうへ向けてこの宿なしの小猫がいくら出しても出してもお台所へ上がつて来て困りますという。主人は鼻の下の黒い毛をひねりながら吾輩の顔をしばらくながめておったが、やがてそんなら内へ置いてやれといったまま奥へはいってしまった。主人はあまり口をきかぬ人と見えた。下女はくやしそうに吾輩を台所へほうり出した。かくして吾輩はついにこの家を自分の住み家ときめる事にしたのである。

吾輩の主人はめったに吾輩と顔を合わせる事がない。職業は教師だそうだ。学校から帰ると終日書斎にはいったがりほとんど出て来る事がない。家のものはたいへんな勉強家だと思っている。当人も勉強家であるかのごとく見せている。しかし実際はうちのものがいうような勉強家ではない。吾輩は時々忍び足に彼の書斎をのぞいて見るが、彼はよく昼寝をしている事がある。時々読みかけてある本の上によだれをたらしている。彼は胃弱で皮膚の色が淡黄色を帯びて弾力のない不活発な徴候をあらわしている。そのくせに大飯を食う。大飯を食ったあとでタカジャスターゼを飲む。飲んだあとで書物をひろげる。二三ページ読むと眠くなる。よだれを本の上へたらす。これが彼の毎夜繰り返す日課である。吾輩は猫ながら時々考える事がある。教師というのは実に柔なものだ。人間と生まれたら教師となるに限る。こんなに寝ていて勤まるものなら猫にでもできぬ事はないと。それでも主人に言わせると教師ほどつらいものはないそうで彼は友だちが来るたびになんとかなんとか不平を鳴らしている。

吾輩がこの家へ住み込んだ当時は、主人以外のものにははなはだ不

人望であつた。どこへ行ってもはねつけられて相手にしてくれ手なかった。いかに珍重されなかったかは、今日に至るまで名前さえつけてくれないのでもわかる。吾輩はしかたがないから、できうる限り吾輩を入れてくれた主人のそばにいる事をつとめた。朝主人が新聞を読むときは必ず彼のひざの上に乗る。彼が昼寝をするときは必ずその背中に乗る。これはあながち主人が好きというわけではないが別にあまり手がなかったからやむを得るのである。その後いろいろ経験の上、朝は飯櫃の上、夜は炬燵の上、天気の良い日は縁側へ寝る事とした。しかしいちばん心持のいいのは夜に入つてこのうちの子供の寝床へもぐり込んでいっしょにねる事である。この子供というのは五つと三つで夜になると二人が一つ床へはいって一問へ寝る。吾輩はいつでも彼らの中間におのれを容るべき余地を見いだしてどうか、こうにか割り込むのであるが、運悪く子供の一人が目さますが最後たいへんな事になる。子供は——ことに小さいほうがたちがわるい——猫が来た猫が来たといつて夜中でもなんでも大きな声で泣きだすのである。すると例の神経胃弱性の主人は必ず目をさまして次の部屋から飛び出して来る。現にせんだってなどは物さして尻べたをひどくたたかれた。

吾輩は人間と同居して彼らを観察すればするほど、彼らはわがままなものと断言せざるを得ないようになった。ことに吾輩が時々同衾する子供のごときに至つては言語道断である。自分の勝手な時は人を逆さにしたり、頭へ袋をかぶせたり、ほうり出したり、へつついの中へ押し込んだりする。しかも吾輩のほうで少しでも手出しをしようにものなら家内総がかりで追い回して迫害を加える。このあいだもちよつと畳で爪をいだら細君が非常におこつてそれから容易に座敷へ入れない。台所の板の間でひとがふるえていてもいっこう平気なものである。吾輩の尊敬する筋向こうの白君などは会うたびに人間ほど不人情なものはないと言っておらる。白君は先日玉のような子猫を四匹産まれたのである。ところがその家の書生が三日目にそいつを裏

の池へ持つて行つて四匹ながら捨てて来たそうだと。白君は涙を流してその一部始終を話した上、どうしてもわれら猫族が親子の愛をまったくして美しい家族的生活をするには人間と戦つてこれを剿滅せねばならぬといわれた。一々もつともの議論と思う。また隣の三毛君などとは人間が所有権という事を解していないといつて大いに憤慨している。元来われわれ同族間では目ざしの頭でも鱈の膾でもいちばん先に見つけたものがこれを食う権利があるものとなっている。もし相手がこの規約を守らなければ腕力に訴えていくらしいものだ。しかるに彼ら人間は毫もこの觀念がないと見えてわれらが見つけたごちそうは必ず彼らのために略奪せらるるのである。彼らはその強力を頼んで正當に吾人が食ひうべきものを奪つて澄ましていく。白君は軍人の家におり三毛君は代言の主人を持つていく。吾輩は教師の家に住んでいく。こんな事に関すると両君よりもむしろ楽である。ただその日その日がかどうにかこうにか送られればよい。いくら人間だって、そういうつまでも榮える事もあるまい。まあ氣を長く猫の時節を待つがよからう。

わがままで思ひ出したからちよつと吾輩の家の主人がこのわがままで失敗した話をしよう。元来この主人はなんといつて人にすぐれてできる事もないが、なんにでもよく手を出したがる。俳句をやつてほととぎす*を投書したり、新体詩を明星へ出したり、間違ひだらけの英文をかいたり、時によると弓に凝つたり、謡を習つたり、またあるときはヴァイオリンなどをブー*ブー鳴らしたりするが、氣の毒な事には、どれもこれも物になつておらん。そのくせやりだすと胃弱のくせにいやに熱心だ。後架の中で謡をうたつて、近所で後架先生とあだ名をつけられてゐるにも関せずいつかう平氣なもので、やはりこれは平の宗盛にて候を繰り返している。みんながそら宗盛だとふき出すくらいである。この主人がどういふ考へになつたのか吾輩の住み込んでから一月ばかりのちのある月の月給日に、大きな包みをさげてあわただしく帰つて来た。何を買つて来たのかと思うと水彩絵の具と毛筆

とワットマンという紙できょうから謡や俳句をやめて絵をかく決心と見えた。はたして翌日から当分の間というものは毎日毎日書齋で昼寝もしないで絵ばかりかいていく。しかしそのかきあげたものを見ると何をかいたものやらだれにも鑑定がつかない。当人もあまりうまくないと思つたものか、ある日その友人で美学とかをやっている人が来た時に下のような話をしているのを聞いた。

「どうもうまくかけないものだね。ひとのを見るとなんでもないようだがみずから筆をとつてみると今さらのようにむづかしく感ずる」これは主人の述懐である。なるほどいつわりのないところだ。彼の友は金縁のめがね越しに主人の顔を見ながら、「そう初めから上手にはかけないさ、第一室内の想像ばかりで絵がかけるわけのものではない。昔イタリーの大家アンドレア、デル、サルトが言つた事がある。絵をかくならなんでも自然そのものを写せ。天に星辰あり。地に露華あり。飛ぶに鳥あり。走るに獸あり。池に金魚あり。枯木に寒鴉あり。自然はこれ一幅の大活画なりと。どうだ君も絵らしい絵をかこうと思ふならちと写生をしたら」

「へえアンドレア、デル、サルトがそんな事をいつた事があるかい。ちつとも知らなかった。なるほどどりやもつともだ。実にそのとおりだ」と主人はむやみに感心している。金縁の裏にはあざけるような笑ひが見えた。

その翌日吾輩は例のごとく縁側に出て心持ちよく昼寝をしていたら、主人が例になく書齋から出て来て吾輩の後ろで何かしきりにやつておる。ふと目がさめて何をしているかと一分ばかり細目に目をあけて見ると、彼は余念もなくアンドレア、デル、サルトをきめ込んでゐる。吾輩はこのありさまを見て覚えす失笑するのを禁じ得なかった。彼は彼の友に押捺せられたる結果としてまず手初めに吾輩を写生しつつあるのである。吾輩はすでに充分寝た。あくびがしたくてたまらない。しかしせっかく主人が熱心に筆を執つてゐるのを動いては氣の毒だと思つて、じつと辛抱しておつた。彼は今吾輩の輪郭をかきあげて

顔のあたりを色どっている。吾輩は自由する。吾輩は猫として決して上乗のきではない。背といひ毛並みといひ顔の造作といひあえて他の猫にまさるとは決して思っておらん。しかしいくら不器量の吾輩でも、今吾輩の主人に描き出されつつあるような妙な姿とは、どうしても思われない。第一色が違う。吾輩はベルシャ産の猫のごとく黄を含める淡灰色に漆のごとき斑入りの皮膚を有している。これだけはだれが見ても疑うべからざる事実と思う。しかるに今主人の彩色を見ると、黄でもなければ黒でもない、灰色でもなければとび色でもない、さればとてこれらを交ぜた色でもない。ただ一種の色であるというよりはかに評し方のない色である。その上不思議な事は目がない。もつともこれは寝ているところを写生したのだから無理もないが目らしい所さえ見えないから盲猫だか寝ている猫だか判然しないのである。吾輩は心中ひそかにいくらアンドレア、デル、サルトでもこれではしようがないと思った。しかしその熱心には感服せざるを得ない。なるべくなら動かずにおつてやりたいと思つたが、さつきから小便が催している。身内の筋肉はむずむずする。もはや一分も猶予ができぬ仕儀となつたから、やむを得ず失敬して兩足を前へ存分にして、首を低く押し出してあゝと大なるあくびをした。さてこうなつてみると、もうおとなしくしていてもしかたがない。どうせ主人の予定はぶちこわしたのだから、ついでに裏へ行つて用を足そうと思つてのそのそはい出した。すると主人は失望と怒りをかきまぜたような声をして、座敷の中から「このばかやろう」とどなった。この主人は人をのしるときは必ずばかやろうというのが癖である。ほかに悪口の言いようを知ないのだからしかたがないが、いままで辛抱した人の氣も知らないで、むやみにばかやろう呼ばわりは失敬だと思ふ。それも平生吾輩が彼の背中へ乗る時に少しはい顔でもするならこの漫罵も甘んじて受けるが、こつちの便利になる事は何一つ快くしてくれた事もないのに、小便に立ったのをばかやろうとはひどい。元來人間というものは自己の力量に慢じてみんな増長している。少し人間より強いものが出

て来ていじめてやらなくてはこの先どこまで増長するかわからない。わがままもこのくらいなら我慢するが吾輩は人間の不徳についてこれよりも数倍悲しむべき報道を耳にした事がある。

吾輩の家の裏に十坪ばかりの茶園がある。広くはないがさっぱりとした心持ちよく日の当たる所だ。うちの子供があまり騒いで案々昼寝のできない時や、あまり退屈で腹かげんのよくないおりなどは、吾輩はいつてもここへ出て浩然の氣を養うのが例である。ある小春の穏やかな日の二時ごろであつたが、吾輩は昼飯後快く一睡したのち、運動かたがたこの茶園へと歩を運ばした。茶の木の間を一本一本かぎながら、西側の杉垣のそばまでくると、枯れ菊を押し倒してその上に大きな猫が前後不覚に寝ている。彼は吾輩の近づくのいっさう心づかざることく、また心づくも無頓着なるごとく、大きないびきをして長々とからだを横たえて眠っている。ひとの庭内に忍び入りたるものがかくまで平氣に眠られるものかと、吾輩はひそかにその大胆なる度胸に驚かざるを得なかつた。彼は純粹の黒猫である。わずかに午を過ぎたる太陽は、透明なる光線を彼の皮膚の上に投げかけて、きらきらする柔毛の間より目に見えぬ炎でも燃えいずるようと思われた。彼は猫中の大王とも言うべきほどの偉大なる体格を有している。吾輩の倍はたしかにある。吾輩は嘆賞の念と、好奇の心に前後を忘れて彼の前に佇立して余念もなくながめていると、静かなる小春の風が、杉垣の上から出たる梧桐の枝を軽く誘つてばらばらと二三枚の葉が枯れ菊の茂みに落ちた。大王はかゝつとそのまん丸の目を開いた。今でも記憶している。その目は人間の珍重する琥珀というものよりもはるかに美しく輝いていた。彼は身動きもしない。双眸の奥から射るとき光を吾輩の矮小なる額の上にあつめて、おめえはいったいなんだと言つた。大王にしては少々言葉がいやしいと思つたがなにしろその声の底に犬をもひしぐべき力がこもっているの吾輩は少なからず恐れをいだいた。しかし挨拶をしないとけんのだと思つたから「吾輩は猫である。名前はまだない」となるべく平氣を装つて冷然と答えた。しかしこの時吾輩

の心臓はたしかに平時よりもはげしく鼓動しておった。彼は太いに軽蔑せる調子で「なに、猫だ？ 猫が聞いてあきれらあ。ぞんてえどこに住んでるんだ」ずいぶん傍若無人である。「吾輩はこの教師の家にいるのだ」「どうせそんな事だろうと思った。いやにやせてるじゃねえか」と大王だけに気炎を吹きかける。言葉つきから察するとどうも良家の猫とも思われない。しかしそのあぶらぎって肥満しているところを見るとごちそうを食ってるらしい、豊かに暮らしているらしい。吾輩は「そう言う君はいいたいだれだい」と聞かざるを得なかった。「おれあ車屋の黒よ」昂然たるものだ。車屋の黒はこの近辺で知らぬ者なき乱暴猫である。しかし車屋だけに強いばかりでちっとも教育がないからあまりだれも交際しない。同盟敬遠主義的になっているやつだ。吾輩は彼の名を聞いて少々尻こそばゆき感じを起こすと同時に、一方では少々輕侮の念も生じたのである。吾輩はまず彼がどのくらい無学であるかをとめしめてみようと思つて左の問答を試みた。

「いったい車屋と教師とはどっちがえらいだろう」

「車屋のほうが強いにきまつていらあな。おめえのうちの主人を見ねえ、まるで骨と皮ばかりだぜ」

「君も車屋の猫だけにだいい強そうだ。車屋にいるとごちそうが食えると思えるね」

「なあにおれなんざ、どこの国へ行つたつて食い物に不自由はしねえつもりだ。おめえなんかも茶畑ばかりぐるぐる回つていねえで、ちつとおれのあとへくつついて来てみねえ。ひと月とたたねえうちに間違えるように太れるぜ」

「追つてそう願う事にしよう。しかし家は教師のほうが車屋より大きいのに住んでいるように思われる」

「べらぼうめ、うちなんかいくら大きくたつて腹の足しになるもんか」

彼は太いにかんしゃくにさわつた様子で、寒竹をそいだような耳をしきりとびくつかせてあららかに立ち去つた。吾輩が車屋の黒と知己

になつたのはこれからである。

その後吾輩はたびたび黒と邂逅する。邂逅することに彼は車屋相当の気炎を吐く。先に吾輩が耳にしたという不徳事件も実は黒から聞いたのである。

ある日例のごとく吾輩と黒は暖かい茶畑の中で寝ころびながらいろいろ雑談をしていると、彼はいつもの自慢をさも新しうに繰り返したあとで、吾輩に向かって下のごとく質問した。「おめえは今までに鼠を何匹とつた事がある」知識は黒よりもよほど發達しているつもりだが腕力と勇氣とに至つては到底黒の比較にはならないと覺悟はしていたものの、この問いに接した時は、さすがにきまりがよくはなかつた。けれども事實は事實で偽るわけにはゆかないから、吾輩は「実はとうとうとうと思つてまだ捕らない」と答えた。黒は彼の鼻の先からびんとつばつてゐる長い鬚をびりびりと震わせて非常に笑つた。元来黒は自慢をするだけにどこか足りないところがあつて、彼の気炎を感心したように咽喉をころころ鳴らして謹聴していればはなはだ御しやすい猫である。吾輩は彼と近づきになつてからすぐにこの呼吸を飲み込んだからこの場合にもなまじいおのれを弁護してますます形勢をわるくするのも愚である、いっその事彼に自分の手がら話をしゃべらしてお茶を濁すにしくはないと思案を定めた。そこでおとなしく「君などは年が年であるからだいいふんとなつたらう」とそそのかしてみた。果然彼は牆壁の欠所に吶喊して来た。「たんとでもねえが三四十はとなつたらう」とは得意げなる彼の答えであつた。彼はなお語をつづけて「鼠の百や二百は一人でいつても引き受けるがいたちつてえやつは手に合わねえ。一度いたちに向かつてひどい目に会つた」「へえなるほど」とあいづちを打つ。黒は大きな目をばちつかせて言う。「去年の大掃除の時だ。うちの亭主が石灰の袋を持って縁の下へはい込んだらおめえ大きないちちのやろうがめんくらつて飛び出したと思ひねえ」「ふん」と感心して見せる。「いたちつてけどもなに鼠の少し大いぐれえのものだ。こんちきしょうつて気で追つかけてとうとうどぶ

の中へ追い込んだと思ひねえ」「うまくやったね」と喝采^{かつさい}してやる。「ところが、おめえいざってえ段になると奴^{やつ}め最後っ屁^ちをこきやがった。臭えの臭くねえのってそれからってえものは、いぢちを見たと胸が悪くならあ」彼はここに至ってあたかも去年の臭気を今なお感ずるごとく前足を揚げて鼻の頭を二三べんまで回した。吾輩も少々気の毒な感じがする。ちっと景気をつけてやろうと思つて「しかし鼠なら君ににらまれては百年目だらう。君はあまり鼠を捕るのが名人で鼠ばかり食うものだからそんなに肥つて色つやがよいのだらう」黒のごきげんをとるためのこの質問は不思議にも反対の結果を呈出した。彼は愕然として大息^{おほいき}している。「考^{かん}えるとつまらねえ。いくらかせいで鼠をとつたつて——いってえ人間ほどふてえやつは世の中にいねえぜ。ひとのつた鼠をみんな取り上げやがって交番つてゆきやあがる。交番じやだれが捕つたかわからねえからそのたんびに五錢ずつくれるじやねえか。うちの亭主なんかおれのおかげでもう壱円五十錢くらいもうけていやがるくせに、ろくなものを食わせた事もありやしねえ。おい人間てものあ体のいい泥棒^{どろぼう}だぜ」さすが無学の黒もこのくらしい理屈はわかと見えてすこぶるおこった様子で背中^{せなか}の毛を逆立てている。吾輩は少々気味が悪くなったからいいかげんにその場をごまかして家へ帰った。この時から吾輩は決して鼠をとるまいと決心した。しかし黒の子分になつて鼠以外のごちそうをあさつてあるく事もしなかった。ごちそうを食うよりも寝ていたほうが気楽でいい。教師の家にいると猫も教師のような性質になると見える。用心しないと今に胃弱になるかもしれない。

教師といえは吾輩の主人も近ごろに至つては到底水彩画において望みのない事を悟つたものと見えて十二月一日の日記にこんな事をかきつけた。

○○という人にきょうの会で始めて出会つた。あの人はだいいぶ放蕩^{ほうたう}をした人だというがなるほど通人らしい風采^{ふうさい}をしている。こういうたちの人は女に好かれるものだから○○が放蕩をしたと言うより

も放蕩をするべく余儀なくせられたと言ひのが適當であらう。あの人の細君は芸者だそうだが、うらやましい事である。元來放蕩家を悪くいう人の大部分は放蕩をする資格のないものが多い。また放蕩家をもつて自任する連中のうちにも、放蕩する資格のないものが多い。これらは余儀なくされないのに無理に進んでやるのである。あたかも吾輩の水彩画におけるがごときもので到底卒業する氣づかない。しかるにも関せず、自分だけは通人だと思つて澄ましている。料理屋の酒を飲んだり待合へはいるから通人となりうるといふ論が立つなら、吾輩もひとかどの水彩画家になりうる理屈だ。吾輩の水彩画のごときはかかないほうがましであると同じように、愚昧なる通人よりも山出しの大野暮^{おのぐさ}のほうがはるかに上等だ。

通人論はちよつと首肯しかねる。また芸者の細君をうらやましいなどというところは教師としては口にすべからざる愚劣の考えであるが、自己の水彩画における批評眼だけはたしかなものだ。主人はかくのごとく自知の明あるにも関せずその自惚心^{おごりこころ}はなかなか抜けない。中二日置いて十二月四日の日記にこんな事を書いてゐる。

ゆうべは僕が水彩画をかいに到底物にならんと思つて、そこらにほうつておいたのをだれかが立派な額にして欄間^{らんかん}に掛けてくれた夢を見た。さて額^{かど}になつたところを見るとわれながら急に上手^{うへ}になつた。非常にうれしい。これなら立派なものだとひとりでながめ暮らしている、夜が明けて目がさめてやはり元のとおりの下手^{へた}である事が朝日と共に明瞭^{めいりょう}になつてしまつた。

主人は夢のうちまで水彩画の未練をしょつてあるといふと見える。これでは水彩画家は無論夫子のいわゆる通人にもなれないたちだ。主人が水彩画を夢に見た翌日例の金縁^{きんぎん}めがねの美学者が久しぶりで主人を訪問した。彼は座につくと劈頭^{はつとう}第一に「絵はどうかね」と口を切った。主人は平氣な顔をして「君の忠告に従つて写生を努めているが、なるほど写生をするとき今まで氣のつかなかった物の形や、色の精細な変化などがよくわかるようだ。西洋では昔から写生を主張した結

果今日のように発達したものと想われる。さすがアンドレア、デル、サルトだ」と日記の事はおくびにも出さないで、またアンドレア、デル、サルトに感心する。美学者は笑いながら「実は君、あれはでたらめだよ」と頭をかく。「何が」と主人はまだからかわれた事に気がつかない。「何がって君のしきりに感服しているアンドレア、デル、サルトさ。あれは僕のちよっと捏造した話だ。君がそんなにまじめに信じようとは思わなかったハハハハ」と大喜悅のていである。吾輩は縁側でこの対話を聞いて彼のきょうの日記にはいかなる事がしるさるであらうかとあらかじめ想像せざるを得なかった。この美学者はこないがかげんな事を吹き散らして人をかつぐのを唯一の楽しみにしている男である。彼はアンドレア、デル、サルト事件が主人の情線にいかなる響きを伝えたかを毫も顧慮せざるもののごとく得意になって下のような事をしゃべった。「いや時々冗談を言う人と人が真に受けるので大いに滑稽的美感を挑撥するのはおもしろい。せんだってある学生にニコラス、ニックルレーがギボンに忠告して彼の一世の大著述なる仏国革命史を仏語で書くのをやめにして英文で出版させたと云ったら、その学生がまたばかに記憶のよい男で、日本文学会の演説会でまじめに僕の話したとおりを繰り返したのは滑稽であった。ところがその時の傍聴者は約百名ばかりであったが、皆熱心にそれを傾聴しておった。それからまだおもしろい話がある。せんだってある文学者のいる席でハリソンの歴史小説セオファーンの話が出たから僕はあれは歴史小説のうちで白眉である。ことに女主人公が死ぬところは鬼氣人を襲うようだ」と評したら、僕の向こうにすわっている知らんと云った事のない先生が、そうそうあすこは実に名文だといった。それで僕はこの男もやはり僕同様この小説を読んでおらないという事を知った」神経衰弱性の主人は目を丸くして問いかけた。「そんなでたらめをいってもし相手が読んでいたらどうするつもりだ」あたかも人を欺くのはさしつかえない、ただ化けの皮があらわれた時は困るじゃないかと感じたもののごとくである。美学者は少しも動じない。「なにその時や

別の本と間違えたとか何とか言うばかりさ」と言っけらから笑っている。この美学者は金縁のめがねはかけているがその性質が車屋の黒に似たところがある。主人は黙って日の出を輪に吹いて吾輩にはそんな勇氣はないと言わんばかりの顔をしている。美学者はそれだから絵をかいてもだめだという目つきで「しかし冗談は冗談だが絵というものには実際むずかしいものだよ、レオナルド、ダ、ヴィンチは門下生に寺院の壁のしみを写せと教えた事があるそうだ。なるほど雪隠などにはいつて雨の漏る壁を余念なくながめてみると、なかなかうまい模様画が自然にできているぜ。君注意して写生してみたまえきつとおもしろいものができるから」「まだだますのだから」「いえこれだけはたしかだよ。実際奇警な語じゃないか、ダ、ヴィンチでもいいような事だあね」「なるほど奇警には相違ないな」と主人は半分降参をした。しかし彼はまだ雪隠で写生はせぬようだ。

車屋の黒はその後びっこになった。彼の光沢ある毛はだんだん色がさめて抜けて来る。吾輩が琥珀よりも美しいと評した彼の目には目やにがいっぱいたまっている。ことに著しく吾輩の注意をひいたのは彼の元気の消沈とその体格の悪くなった事である。吾輩が例の茶園で彼に会った最後の日、どうだと言って尋ねたら「私たちの最後っ屁とさかな屋の天秤棒には懲り懲りだ」といった。

赤松の間に二三段の紅をつづった紅葉は昔の夢のごとく散ってつくばいに近くか、わがる花びらをこぼした紅白の山茶花も残りなく落ち尽くした。三間半の南向きの縁側に冬の日あしが早く傾いて木枯らしの吹かない日はほとんどまれになってから吾輩の昼寝の時間もせばめられたような気がする。

主人は毎日学校へゆく。帰ると書斎へ立てこもる。人が来ると、教師がいやだいやだという。水彩画もめったにかかない。タカジャスターゼも機能がないうってやめてしまった。子供は感心に休まないで幼稚園へかよう。帰ると唱歌を歌って、まりをついて、時々吾輩をしつぽでぶらさげる。

吾輩はごちそうも食わないから別段肥りもしないが、まずまず健康でびっこにもならずその日その日を暮らしている。鼠は決して取らない。おさんはいまだにきらいである。名前はまだつけてくれないが、欲をいっても際限がないから生涯この教師の家で無名の猫で終わるつもりだ。

二

吾輩は新年来多少有名になったので、猫ながらちょっと鼻が高く感ぜらるるのがあるが、

元朝早々主人のもとへ一枚の絵はがきが来た。これは彼の交友某画家からの年始状であるが、上部を赤、下部を深緑で塗って、そのまん中に一の動物がうずくまっていたところをバステルでかいてある。主人は例の書斎でこの絵を、横から見たり、縦からながめたりして、うまい色だなという。すでに一応感服したものだから、もうやめにするかと思うとやはり横から見たり、縦から見たりしている。からだをねじ向けたり、手を延ばして年寄りが三世相を見るようにしたり、または窓のほうへむいて鼻の先まで持ってきたりして見ている。早くやめてくれないとひざが揺れてけんのんでたまらない。ようやくの事で動揺があまりはげしくなつたと思つたら、小さな声でいったい何をかいたのだらうと言う。主人は絵はがきの色には感服したが、かいてある動物の正体がわからぬので、さつきから苦心をしたものと見える。そんなわからぬ絵はがきかと思ひながら、寝ていた目を上品に半ば開いて、落ち付き払って見ると紛れもない、自分の肖像だ。主人のようにアンドレア、デル、サルトをきめ込んだものもあるまいが、画家だけに形体も色彩もちゃんと整つてできている。だれが見たつて猫に相違ない。少し眼識のあるものなら、猫のうちでもほかの猫じゃない。吾輩である事が判然とわかるように立派にかいてある。このくらい明瞭な事をわからずにかくまで苦心するかと思うと、少し人間が気の毒になる。できる事ならその絵が吾輩であるという事を知らしてや

りたい。吾輩であるという事はよしわからないにしても、せめて猫であるという事だけはわからしてやりたい。しかし人間というものは到底吾輩猫属の言語を解しうるくらいに天の恵みに浴しておらん動物であるから、残念ながらそのままにしておいた。

ちょっと読者に断つておきたいが、元来人間がなんぞという猫と、事もなげに軽侮の口調をもって吾輩を評価する癖があるのははだよくない。人間の槽から牛と馬ができて、牛と馬の糞から猫が製造されたごとく考えるのは、自分の無知に心づかんで高慢な顔をする教師などにはありがちの事でもあらうが、はたから見てもあまりみっともないものじゃない。いくら猫だって、そう粗末簡便にはできぬ。よそ目には一列一体、平等無差別、どの猫も自家固有の特色などはないようであるが、猫の社会にはいつてみるとなかなか複雑なもので十人十色という人間界のことばはそのままここにも応用ができるのである。目つきでも、鼻つきでも、毛並みでも、足並みでも、みんな違う。髯の張り具合から耳の立ちあがり、しっぽのたれかげんに至るまで同じものは一つもない。器量、不器量、好ききらい、粹無粋の数をつくして千差万別と言つてもさしつかえないくらいである。そのように判然たる区別が存しているにもかかわらず、人間の目はただ向上とかなんとかいって、空ばかり見ているものだから、われらの性質は無論相貌の末を識別する事すら到底できぬのは気の毒だ。同類相求むとは昔からあることばだそうだがそのとおり、餅屋は餅屋、猫は猫で、猫の事ならやはり猫でなくてはわからぬ。いくら人間が発達したつてこればかりはためである。いわんや実際をいうと彼らがみずから信じているごとくえらくもなんともないのだからなおさらむずかしい。またいわんや同情に乏しい吾輩の主人のごときは、相互を残りなく解すというのが愛の第一義であるということすらわからない男なのだからしかたがない。彼は性の悪い牡蠣のごとく書斎に吸い付いて、かつて外界に向かって口を開いた事がない。それで自分だけはすこぶる達観したような面構えをしているのはちょっとおかしい。達観しない証拠